

## 第8講 市民人口の減少とスパルタ社会の多層化 ーヒュポメイオネスとネオダモデイスー

### ヒュポメイオネスとネオダモデイス

古典的なスパルタの住民身分階層（スパルタ市民 - ペリオイコイ - ヘイロタイ）とは異なる住民身分階層。

このような住民構成はペロポネソス戦争以降のスパルタ社会の変質を反映しているのか、それとも従来から存在していて史料に言及されなかっただけなのか。

### ネオダモデイス

ネオダモデイスは前 421 年のレプレオン入植に初出 (Thuc. 5. 34)

ティブロンやアゲシラオスの小アジア遠征軍に従軍 (Xen. *Hell.* 3. 1. 4; 3. 4. 2)。

しかし前 394 年のネメアの戦いには言及されず (Xen. *Hell.* 4. 2. 16) 拡大した帝国の防衛に活用。

長期に及ぶ遠征や守備に従軍。

スパルタ市民兵とペリオイコイ兵から構成されるラケダイモン人部隊本隊 (Lakedaimonioi autoi: Thuc. 5. 67. 1) には編入されていない。

「新市民」と訳されるが、スパルタ市民となったわけではない。

居住地登録の問題。

彼らの経済的基盤は？

### ヒュポメイオネス

hypo (「下方に」: 前置詞) + meiones (<meioō: 「衰える」: 動詞・中・受動相分詞) の合成語

劣格性を表している

homoioi (同等者) と呼ばれるスパルタ市民層とは区分

エフォロイの命令によって伝令のような国務に就任する経験はある。

しかし従軍兵としては言及されていない。

スパルタ市民の減少とヒュポメイオネス層の増加が密接に連動しているのかは不明。必ずしも対称性を成しているようには見えない。

経済的に没落したスパルタ市民層の受け皿としてヒュポメイオネス身分は機能していたのか？

スパルタ市民人口の減少と経済的没落が同一なのか？市民人口の減少には別の要因が（も？）考えられるのか。

人口の静止型社会で、幼児死亡率の高い社会において直系の子孫のみで家を維持していくことは可能なのか？

アテナイの *epikleros*（家付き娘）のように婿を迎えるか、養子縁組によって相続人を確保する方法によって家を維持する（江戸時代の大名家のように）。

何れにせよ、ヒュポメイオネスはスパルタ社会の中では何千人というような印象的な数字ではなかったようだ（何百人あるいはそれ以下）。

独立した部隊を編成することもなく、単独で政治変革を起こしうるだけの規模もなく、スパルタ市民の支配に不満を抱くペリオイコイやヘイロタイとの連携を模索しなければ事を為し得なかったのではないか。

それだけにキナドンの現状に対する鬱屈した思いは強烈だったのではないか。

#### Arist. *Pol.* 1270a 35-39:

「それ故その地は 1500 騎の騎兵、1000 名ではなく、30000 名もの規模の重装歩兵を養うことができたのである。彼らのそのような取り決め（贈与および遺贈の自由のこと：訳者）が彼らには有害であったことは結果そのものによって明らかとなった。というのはたったひとつの敗北によってそのポリスが衰退したのではなく、人口過少（オリガントロピア）によって壊滅してしまったのだ。かつての王たちの時代には市民権を分ち合い、長年にわたって戦争をしていたけれど、人口過少ではなかったと人々は言うており、かつてスパルティアタイは一万人もいたと言っている。それにも拘わらず、それが事実であれ事実でないということであれ、ポリスが財産を平等にすることによって人口を増やすほうが優れている。しかし出産に

関する法律はそれとは反対の処遇である。」

**Xen. *Hell.* 3. 3. 5:**

「この人物は外見からして若者であり、頑強な精神の持ち主であったが、ホモイオイの一員ではなかった。それでエフォロスたちがその企てがどのようなものなのかについて彼が語ったことについて質問すると、その通報者はキナドンが自分をアゴラの端に連れていき、アゴラの中にどれくらいのスパルティアタイが居るのかを数えるように命じたのです。それで私は王やエフォロスたち、長老会の議員たちやその他の者たちを 40 名ばかりを数え上げて、尋ねました。キナドンよ、どうして数えるよう命じるのですか。すると彼はこう答えました。これらの者たちは君にとって敵であり、アゴラに居る 4000 名以上のその他の人々の全てが味方だと看做したまえと、彼は言いました。そして道で出会う人を、こちらで一人、あちらで二人と指さしながら全てが敵であり残りの人すべてが味方だと私に言いました。たまたまスパルティアタイの所領にいたとしても、敵は主人一人であり、そこに居る多くのものが味方なのだ。」

**Xen. *Hell.* 3. 3. 6:**

「それでエフォロスたちがどれくらいの数があるかその行為に通じていると彼が言っていたのかと問い質すと、そのことについて彼はそのような指導者となる人々は決して多くはないが、信頼に足る人々が通じていると彼が言ったと述べたのである。そのような人々は全てのヘイロタイやネオダモデイス、ヒュポメイオネス、それにペリオイコイに通じている。これらの人々においてスパルティアタイについて議論される時には、誰も喜んで彼らを生で食ってしまえるのだということを隠しておくことはできないのだ。」

**ティブロン遠征軍 (Xen. *Hell.* 3. 1. 4.)**

「[4] それでラケダイモン人は、およそ 1,000 名のネオダモデイス兵、およそ 4,000 名のペロポネソス兵、から成る遠征軍をさずけて、ハルモステ

スのティブロンを彼らのもとに派遣したのであった。ティブロンは、自ら給与を提供すると語って、アテナイ人からの 300 騎の騎兵を求めたのであった。」

デルキュリダスの遠征軍 (Xen. *Hell.* 3. 1. 28.)

「(28) 外に出ると戸口のところで部隊長 (タクシアルコス) 達や大隊長 (ロカゴス) 達を見かけると、「諸君、我々には 8000 名の兵に、ほぼ 1 年間分の給金が手に入ったぞ」と彼は彼らに語ったのである。」

アゲシラオスの遠征軍 (Xen. *Hell.* 3. 4. 2.)

「[2] ラケダイモン人は期待に胸を膨らませて同盟軍を招集し、何を為すべきかを相談し、リュサンドロスはギリシア方が海軍に関しては圧倒的に優位にありキュロスと共に遠征して無事に戻ってきた陸上部隊を計算に入れるべきだと考えて、アゲシラオスに、30 名のスパルタ市民、およそ 2,000 名のネオダモデイス兵、およそ 6,000 名の同盟諸国軍を与えるから、アジアに遠征すると約束するよう説いたのであった。」

ネメアの戦い (Xen. *Hell.* 4. 2. 16.)

「[16] 両軍の戦力を列挙してみよう。ラケダイモン人はほぼ 6000 名、エーリス人及びトリピュリア人、アクロレイア人、ラシオン人はほぼ 3000 名、シキュオン人が 1500 名、エピダウロス人、トロイゼン人、ヘルミオネ人それにハリアイ人が 3000 名より少なくない数が数え上げられた。それに加えて約 600 騎のラケダイモン人騎兵、300 名ほどのクレタ人弓兵、400 名より少なくないマルガネ人、レトリノス人それにアンフィドイオイ人の投石兵が従軍した。プレイウス人は従軍しなかった、というのは休戦中だと申し立てていたからである。以上がラケダイモン人と共にあった軍勢であった。」

アゲシポリスのオリュントス遠征 (Xen. *Hell.* 5. 3. 8-9.)

「[8] 事件を耳にすると、ラケダイモン人によって評議が行われ、勝利を

収めた者たちの野望を鎮めこれまで行われてきたことが無駄にならないように、十分な規模の軍勢を派遣すると決定されたのであった。このように決定すると、司令官として王のアゲシポリスを、そして彼と一緒にアゲシラオスがアジアに遠征した時のように 30 名のスパルタ市民を派遣したのであった。[9] 彼に多くの者が、とりわけペリオイコイの中でエリート階層（カロイ・カガトイ）の志願兵たち、養い子（トロフィモイ）と呼ばれる人々の外国人（クセノイ）、スパルタ市民の庶子（ノトイ）たちが従軍したが、この人たちは容姿において大いに優れポリスにおいて十分に経験を有していた。さらに同盟諸都市からの志願兵たち、テッサリア人の騎兵、アゲシポリスと近づきになりたいと望んでいた人々、さらに以前よりも熱心にアミュンタスやデルダスが遠征に参加したのだった。アゲシポリスはこのような状況下でオリュントスに向けて進軍したのであった。」

古典的な住民構成（単位 千人）

	前 480-460 年	前 371 年	前 3 世紀
スパルタ市民:	4~5	2.5~3	2~2.5 (?)
劣格市民:	0.5 (?)	1.5~2	1.5~2 (?)
家族を含む市民:	12	7~9	6~8 (?)
ペリオイコイ:		40~60 (?)	
ヘイロタイ:		140~200 (?)	
全住民:		190~270 (?)	

出典：V. Ehrenberg (1964), *The Greek State*, New York, 33.

【参考文献】

P. Cartledge (2002), *Sparta and Lakonia: a regional History 1300 to 362 BC.*, London/ New York.

E. David(1979), "The Conspiracy of Cinadon". *Athenæeum* 57, 239-259.

J. Ducat (1990), *Les Hilotes*, École française d'Athènes, Hellenic correspondence bulletin, suppl. XX, esp. 155-173.

- V. Ehrenberg (1964), *The Greek State*, New York.
- W. G. Forrest (1968), *A History of Sparta 950-192 BC.*, London.
- S. Hodokinson (1989), "Inheritance, Marriage and Demography: Perspectives upon the Success and Decline of Classical Sparta", in A. Powell (ed.), *Classical Sparta: Techniques behind her Success*, London, 79-121.
- A. H. M. Jones (1968), *Sparta*, Oxford.
- J. F. Lazenby (1977), "The Conspiracy of Cinadon reconsidered". *Athenæum* 55, 437-443.
- E. Lévy (2003). *Sparte : histoire politique et sociale jusqu'à la conquête romaine*. Seuil, coll. *Points Histoire*, Paris.
- G. Shipley (2004), "Lakedaimon", in M. H. Hansen & Th. H. Nielsen (eds.) *An Inventory of Archaic and Classical Poleis*, Oxford/ New York, 570.
- R. Talbert (1989), "The Role of the Helots in the Class Struggle at Sparta", *Historia* 38, 22-40.
- R. Vattone (1982), "Problemi spartani. La congiura di Cinadone". *RSA* 12, 19-52.
- 太田秀通、『東地中海世界』、岩波書店、126-170。
- W. G. フォレスト (丹藤浩二 訳) (1990)、『スパルタ史』、溪水社。
- 古山正人 (1984)、「ヒュポメイオネス考 -スパルタ社会の変容の一側面-」『新潟史学』17、38-56。
- 同 (1984)、「ネオーダーモデイス -ヘイロータイの解放と軍役-」『西洋史研究』新輯13、53-77。
- 同 (1989)、「モタケス、トロフィモイ、スパルティアタイのノトイ -スパルタの小社会集団-」『歴史学研究』597、2-18。